

学会活動の国際競争力と英文論文誌の役割

監事 岩垂 好裕

最近の日本は、よく知られているように慢性的な貿易黒字に悩み(？)、その調整が大きな国際問題になっている。このように産業面では、日本の国際競争力も国際的なレベルに達していると考えられるが、学会活動の国際競争力は如何なものであろうか。

それは種々の学問分野によって異なるであろうが、筆者の専門の情報理論の分野についてしてみると、終戦直後の混乱期においても、極めて優れた国際的な水準の研究成果がいくつか発表された。しかしこれらの優れた研究は、当時の情勢から海外渡航や海外発表が全く不可能であったため、残念ながらその多くは国際的には無視されてしまった。筆者の大学院生の時代になると、わずかながら海外留学の道も開け、筆者もフルブライト留学生としてMITに留学した。しかしこのころの留学生は、ほとんど例外なく英語の能力不足に悩まされた。当時留学生仲間にもことしやかに流布された仮説は、中国語と英語の文法は類似しているので中国人は英語がうまいが、日本語と英語の文法は根本的に異なるので、日本人がいくら努力しても、決して中国人のように英語がうまくならないというものであった。しかしこの仮説は、最近の若い人の中に皇太子殿下の御婚約者の小和田雅子さんのように、極めて語学の堪能な人が出現するに及んで、はかなくも棄却される運命となった。

このように日本人も語学に堪能になり、また貿易黒字のおかげで海外の学会への出席や海外誌への投稿が積極的に行われるようになって、学術面での国際競争も一応確立されたと考えることもできよう。しかしながら海外の学会の活動の主体性は当然外国にあるわけであるから、我が国における活動を中心に紹介するというわけにはいかないのは当たり前である。

上のような観点からすると本学会の英文論文誌は、本学会が主体性を保持しながら我々の活動を海外に紹介するものであり、本学会の研究活動の国際的競争力を飛躍的に高める切札として大いに期待される。後はできるだけ優れた研究業績をできるだけ多く掲載することと、海外での購読者数を増やすことである。新編集長のもと、本学会の英文論文誌の発展を期待したい。